

# 第35回

## 昭和の色香、園まりと 『逢いたくて逢いたくて』

フジテレビ放送開始の3年後、昭和37年4月に渡辺プロダクションが中心となり『森永スパーク・ショー』が始まりました。この番組で司会を担当していたことから、同プロ所属の中尾ミエ、伊東ゆかり、園まりは「スパーク三人娘」と称されるようになります。

カバー曲を歌う三人娘のイメージが変わったのは、昭和39年10月に発売された園まりの『何も云わないで』（詞・安井かずみ、作編曲・宮川泰）からで、それまでフォークソングの『花はどこへ行った』などを素直な発声でおとなしそうに歌っていた彼女は、しっかりと歌いあげる大人の歌手へと変貌をとげます。

そして、その1年2か月後、彼女のイメージを決定づけることになる名曲、『逢いたくて逢いたくて』（詞・岩谷時子、曲・宮川泰、編・森岡賢一郎）が登場します。

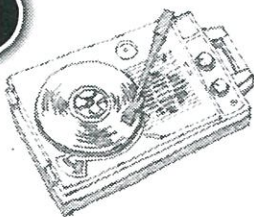
同曲の公式発売日は昭和41年1月5日となっていますが、実は、前年の大晦日、『NHK紅白歌合戦』の

大舞台で、彼女は発売前だったこの曲を披露しています。「紅白」に発売前の歌が登場するというのも異例

### 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いまでも

堀井六郎  
絵・松本浦



ですが、テレビを見ていた男性は、21歳の蠱惑的な「囁き唱法」にさぞかし驚いたことでしょう。その年の「紅白」の視聴率は78%という、今から考えると驚異としかいえない数字だったこともあり、放送後の反響はすさまじく、年が明けると同曲はヒット街道を驀進、すぐに日活で同名の歌謡映画が企画され、「紅白」から半年も経ずして園まりの姿を大きなスクリーンで堪能することになりました。

映画の中ではヒット曲だけでなく、童謡『この道』も歌っています。実は園まりは小学生当時「歌のおばさん」安西愛子に師事していた本格派で、12歳の頃にはキングレコード

から童謡歌手としてデビューしています。

大人の歌手に変貌した園まりの独白歌謡物を通して言えることですが、歌の中に登場する「あなた（実は聴き手の男性）」への訴え方は、映画での彼女の台詞回しの巧みさと共通しています。女心をわかってほしいと訴えられる「あなた」に、聴く者自身を重ねざるを得なくなるような歌唱法は、あの美貌と相まって比類なき悩殺力を持っていたのです。

なお、『逢いたくて』の冒頭の旋律ですが、宮川は、戦後間もない昭和22年に平野愛子が歌って大ヒットした『港が見える丘』の前奏部から借用しています。前奏には一部ジャズやブルースで使用されるブルーノート（の音階も使われていて、そのあたりがジャズ出身の宮川に「いつかこんなメロディーを使ってみたい」と思わせていたのかもしれない）。

ただし、『逢いたくて』の最大の魅力は、サビの聴かせ所でプレイクして、園まりの声だけ強調される箇所（に）に尽きます。あえてほんの少しかすれ気味の声を出すことで妖艶さが増し、世の男性諸氏の心をわしづかみにしたのです。平成の歌にはない色香ですね。